

2022年10月9日 礼拝説教要旨

詩編講解説教123「主よ、憐れみたまえ」

詩編123：1～4、マタイ20：29～34

詩編第123編では、巡礼者そのものにスポットが当てられています。彼らがどういう状況を抱えながら、エルサレムへとやってくるのか。「わたしたちを憐れんでください。主よ、わたしたちを憐れんでください。わたしたちはあまりにも恥に飽かされています。平然と生きる者らの嘲笑に、傲然と生きる者らの侮りに、わたしたちの魂は飽かされています」(3～4節)「嘲笑」「侮り」というのは、人を軽く見る、軽く扱うことです。もしわたしたちが蔑まれ、人として尊重されないということがあるなら、それは耐え難いことであり、屈辱的なことです。しかもここには「飽かされる」と繰り返されていますが、これは「満たされる」「満腹する」ということです。この詩人はそういう状況を嫌という程、味わってきたのです。一つには、それはこの詩人が社会的にも弱い立場にいたことを示しています。「御覧ください、僕が主人の手に目を注ぎ、はしためが女主人の手に目を注ぐように」(2節)ここには「僕」「はしため」という言葉があります。実際に主人に仕える奴隷であったかもしれません。そういう身分であって蔑まれてきた。動物のように、モノのように扱われてきた。そういう悲しみ、痛みを抱えながら、巡礼者たちはエルサレムへやってきます。

また、この詩の背景にもやはりバビロニア捕囚があると言われますが、異国の地に散らされ、そこで味わってきた様々な苦しみを想像することができます。また帰還してからも、周囲の国々からの攻撃、また同胞の中にも不和がありました。貧富の格差が生じ、人々の中から不満が噴出していったと言われます。捕囚からの帰還後にエルサレムの城壁を再建する話がネヘミヤ記にあります。ネヘミヤ記5章などを見ると、負債が増えて自分の子どもを奴隷に出さざるを得ない親の嘆きが記されています。そういう社会情勢がこの詩に反映されていること考えられます。何れにしても、この詩人が社会的に低い立場に置かれ、人として正當に扱われない悲しみ、痛みを抱えていると考えてよいでしょう。

その人がどのような境遇にあらうとも、人が人として尊重されない、軽くあしらわれてしまう社会はやはりおかしいのです。しかし、この日本社会もまた人が本当に大切にされているかと言えば、決してそうではありません。仕事においても、モノのように扱われて、最後は捨てられてしまうような、そういう扱いを受けることがあります。過労死の問題も後を絶ちませんし、外国人労働者への待遇が問題になっております。障害者への差別もあります。また年をとり衰えていきますと、それまで社会の中心にいた人が、だんだん周辺に追いやられてしまう。もう自分は社会からも家庭からも必要のない人間になってしまったと嘆く。そういう切なさを感じながら生きている人は多いのです。わたしたちが気づかないところ、知らないところで、実は多くの人々が生きづらさを感じ、助けを求めています。でもその一方で4節にあるように「平然と生きる者たち」「傲然と生きる者たち」がいる。そんなこと知ったことか。自己責任だ。そういう無関心が世の中を支配しています。自分さえよければいい。わたしたちの社会は、そういう温もりの欠けた、優しさのない社会になっているのではないのでしょうか。

人が人として扱われない。その原因は何でしょうか。詩編115編8節に「偶像を造り、それに依り頼む者は、皆、偶像と同じようになる」とあります。偶像を拝む時に、人が偶像、モノになってしまう。わたしたちがまことの神さまから離れ、ただ世の中のことばかりになる時に、

わたしたちは罪の中にとらわれ、自分自身を見失い、また他者の存在も見失うこととなります。聖書はそういうわたしたちの罪を見つめています。しかし、この詩編は、そういう罪に支配され、苦しめられているわたしたちこそ、エルサレムに向かって旅をする巡礼者であり、主の家に招かれた者たちであると言います。主イエスは言われました。「疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11:28)「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である・・・わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ 9:12~13)なぜなら、この主の家には、そういう蔑まれた者を深く憐れまれるお方がおられるからです。

人が人として扱われない世の中であって、唯一、わたしたちが人間らしく、その人がその人らしく生きることができる場所、自分を取り戻し、回復される場所、それはわたしたちをお造りになられた神さまの御前だけです。わたしたちはどこで自分を取り戻すのでしょうか。自然の中でしょうか。趣味に没頭している時でしょうか。そうではありません。神さまの御前において、初めて人は人になれる。人間として回復されるのです。そしてその場所こそ、巡礼者たちが目指している目的地、礼拝なのです。

今日の詩編には「憐れんでください」という言葉が繰り返されます。「わたしたちを憐れんでください。主よ、わたしたちを憐れんでください」(3節)ここに出てくる「憐れむ」という言葉は、上からこの隔たりを埋めて近づくことを意味します。ギリシア語では「エレオス」ですが、同情して助けること。ただ同情するだけではない。具体的に助けること。そのために神さまが人間の領域まで実際に踏み込んで行かれることを意味します。そしてその憐れみの極みこそイエス・キリストに他なりません。キリストは天からこの罪に満ちた世界へと遣わされました。ご自身が僕としてわたしたちに仕えてくださいました。人々からののしられ、嘲られ、最後は十字架で死なれました。「平然と生きる者らの嘲笑、傲然と生きる者らの侮り」(4節)をその身に引き受けてくださった。けれども三日目によみがえられて、そのわたしたちを神の都へ、主の家に迎え入れてくださるのです。この神さまの憐れみ、救いを先取りし現しているのが教会であり、この礼拝です。ここでわたしたちは人として自分自身を取り戻し、回復されます。そしてそのように自分を回復された者は、他者を助ける務めへ導かれるでしょう。人を人として尊重する。そういう新しい生き方が可能になります。